

# 日本英語文化学会第 25 回全国大会 <創立 50 周年記念大会>

## 研究発表概要 (レジюме)

### 一般発表

#### 第 1 発表

John Milton の作品における百合の描写

桶田 由衣 (日本大学)

17 世紀叙事詩人 John Milton (1608-74) の作品に描かれる花に関する研究は、Don Cameron Allen, Louis L. Martz, Ruth Summar McIntyre などによってなされており、Milton 研究においては新奇なものではない。従来の研究においては、Milton の晩年の叙事詩 *Paradise Lost* (1667) における花の描写に関するものが多く、かつその中でも薔薇に焦点を当てたものが多かったように思われる。薔薇は、Milton の作品の中で約 20 箇所使用されている。Milton にとって薔薇は、単にキリスト教における象徴的な花であっただけでなく、Milton 独自の観点でも描写されており、研究対象となってきた。しかしながら、薔薇と同様に、キリスト教関連の芸術作品で描かれることの多い百合に関しては、Milton 研究の中で、多分に研究されてきていないと思われる。Milton の作品の中で百合は、現在のところ 4 箇所のみが認められている。その一例として、Milton の仮面劇 *A Mask* (1634、通称 *Comus*) において、主人公を救出する *Severn* 川の仙女 *Sabrina* の髪が百合の組紐で結えられているという描写があり、救世主に類する人物に関連して百合が用いられている。使用例は少ないものの、各箇所の百合の描写を検証すると、ある特徴が浮き彫りになり、Milton が百合を作品でどのように用いていたかを研究する余地はあると言える。本発表では、*A Mask* を含めた Milton の作品において、百合が用いられている場面などを検証し、その特徴を明らかにする。

#### 第 2 発表

CLIL 教育における一考察：SDGs の観点から

高橋 強 (東海大学)

2022 年度前期に、発表者が非常勤講師を務める日本大学生物資源科学部の獣医学科の授業で、CLIL (内容言語統合型学習) という教授法を用い、SDGs (持続可能な開発目標) についての授業を実践した。この授業に関しては、学生に 5 件法による質問紙を用いた調査を行い、その結果に基づいて、口頭発表を行う。授業では、主に科学英語の内容を英語で読み、書き、グループワークとプレゼンテーションを行うことを目的とした。そこで、今回の CLIL の授業実践は、Soft CLIL というボトムアップ形式の手法を用い、完全なバイリンガル形式の授業を実践した。初めに SDGs の概念を学び、CLIL の 10 原則の一部である 4 技能を伸ばすこと、思考力を重視し、協同学習と国際問題の要素を取り入れ、CLIL の 4 つの C である Content, Cognitive, Community, Communication 能力を養うことを目的とした。また授業では、Bloom (1956) が提唱した Taxonomy の分類法において、特に、Create, Evaluate, Analyze という HOTS (Higher Order Thinking Skills) に分類される問題解決型のグル

ープワークを実践した。また CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) という学習言語能力を養成することで、学習の認知度を高め、低コンテキストで考える英語力の習得に繋げることを目的とした授業実践を行った。

次に質問紙による 20 項目からなる学生からの回答を分析すると、CLIL 教育の利点と問題点が、発表者の授業で浮き彫りとなった。これらの解答を数値化し、可視化することでより鮮明に、CLIL 教育に関しての授業実践を推進し、提言していく。また個々の質問と授業で扱った SDGs の内容に関しては、発表時にパワーポイントで説明することとする。今回の調査で、判明したことを大きく分けると次の二つになる。まず一つ目は、獣医学と SDGs という内容が学生のニーズに合致していたことで、学生が無理なく SDGs という分野に入っていくことが出来たこと。それと二つ目は、内容が難しく理解度が低くなっているときにグループワークで学生同士が共に助け合いながら SDGs に関する問題点を補完し取り組んでいたことなどは特筆すべき点であると言える。これらの利点あるいは問題点に関して科学的な見地から研究発表することで CLIL 教育の重要性について述べていく。

### 第 3 発表

『響きと怒り』における門と柵の表象

小野 雅子 (東邦大学)

ウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』は、周知のとおり、南北戦争での敗北後のかつての貴族階級の没落の物語という枠組みのもと、親としての役割を果たすことのできない両親とその子どもたちの悲劇である。だが、この発表では、作品の内容とは一見さほど関係がないように思われる、コンプソン屋敷の門と柵に焦点を当てて、作品を考えてみたい。

家には、門や柵がある。門は、外の世界からの侵入者を防ぐ役割と同時に、門を開くことによって家の外の世界の人々との交流を行い、さらに人は外の世界に出て行く。柵の役割は、所有地の境界であり、領地や財産を守るためのものであるが、時に外に人が出ていくことも妨げる。

南北戦争以前には貴族として繁栄を誇ったコンプソン一族の建てた屋敷にもまた、門と柵がある。コンプソン一族は、「付録」にあるようにヨーロッパから渡ってきて、大きな領地を得て、社会的な名士を出すまでに発展した。だが、その一族が南北戦争を契機に没落し、経済的にもさほど豊かではなく、領地も失う中、外部から来る人間もいないし、また外からの侵入者を防ぐ必要はなくなっている。その中で、門や柵は、どのような役割を果たしているのか。一般的な門と柵が果たしている役割と、他方、コンプソン一族にとっての門と柵が果たす役割を比較することで、門と柵という装置が『響きと怒り』という作品を象徴するものとなっていることを明らかにしたい。

さらに、のちにマルカム・カウリーの依頼により書かれた『付録』で明らかにされる、門と柵に囲まれたコンプソン家から出ていった登場人物についても言及したいと思う。

## 創立 50 周年記念企画 <日本人の英語習得——多様な視点から>

日本英語文化学会は、その前身である「上毛英米文学会」「ビビュロス同人会」「ビビュロス研究会」を含めると、今年で 50 年目を迎える。そこで、本大会では《創立 50 周年記念企画》として、私たちの共通の関心事である「日本人の英語習得」をテーマに 4 人の発表者が多様な視点から議論する。

### 第 1 発表

日本人にとって習得の難しい分野

水野 晶子 (拓殖大学)

本研究では、帰国子女ではなく、日本の英語教育を受けて英語を十分コミュニケーションレベルまで習得した日本人英語使用者 20 名を対象に実施したアンケート調査とインタビュー調査の結果分析をもとに、日本人にとって習得の難しい分野を議論する。具体的には、英語習得において、[i]どこが一番努力が必要であったか、[ii]今も多かれ少なかれ困難を感じるのはどこか、[iii]効果的であった英語の勉強法はどのようなものであったか、の 3 点に焦点を当てる。

「日本人が英語を口頭運用する際に何が最も困難か」を特定するには、運用時の言語処理を意識化できることが条件だという成田 (2013: 244) の指摘を踏まえ、調査にはあえて英語教育従事者や言語学の研究者等にも協力してもらった。

英語教師には、「英語を使える日本人」として、英語処理中の脳内の働きが意識できる、すなわち、どういう構文にするか、どの単語が適切かなど、自身が発話構成中にどのような選択を行っているかをある程度意識でき、また、そうした意識的なプロセスがどの程度負担になるのかが実感できる人が少なくないだろうという成田 (2013: 244) の推測は、発表者自身の直感とも一致する。日本人の英語習得において習得が難しいのは一体どのような分野であるのか、半世紀以上に及ぶ発表者自身の英語学習の体験も織り交ぜて考察した結果を発表する。

### 第 2 発表

Japanese or Asian? L2 Accent Identification by L1 English Listeners

Eimi Watanabe (Hosei University)

This study investigated whether advanced Japanese learners of English could pass for L1 English speakers in the United Kingdom. It also examined whether prior information influenced the listeners' perception. Before listening to the audio recordings, one group of participants were provided information about the speakers' language background, and the other group were not. Both listener groups correctly identified the recorded voices as L2 speakers of English and noticed common non-native features such as the conflation of /l/ and /r/. However, the unprimed group could not distinguish a Japanese accent from other East Asian accents. Furthermore, the primed group were more sensitive to the phonetic features. The study indicated that the L2 speakers, however fluent, are easily judged to be as such, although their L1 background could not be accurately identified. At the same time, prior information played a significant role in the listeners' identification of accents.

### 第3発表

戦後日本の英語教育とアメリカ

谷 憲治 (武蔵大学)

アメリカに対する敗戦後、日本がアメリカによる全面的な統治を余儀なくされたのは周知の事実である。しかし、サンフランシスコ講和条約の調印及び発効により形式上独立国となったはずの日本にも継続的に様々な積極的外交及びプロパガンダ活動を行うことで、云わばアメリカの属国としての日本の世論をコントロールしてきた。そのうちの一つの例として、英語教育の推進が挙げられる。この発表では、サンフランシスコ講和条約の発効以降、アメリカが如何に日本の英語教育に関与していたのかをアメリカ公文書館その他の一次資料をもとに解き明かす。そしてその活動の効果が如何に大きかったかについて確認する。

### 第4発表

Behind Japanese ELF Users' Preference for Inner Circle English

Yutai Watanabe (Hosei University)

Applied linguists in Japan have made strenuous efforts to encourage learners' interest in World Englishes, while bringing their attention to L2 users' co-ownership of English in the global era. The objective of this research was to look for a possible change of university students' attitudes towards varieties of English due to a recent paradigm shift in the policy and practice of English language teaching (ELT). It was revealed that favouritism towards Inner Circle English, in particular US English, still lingers, despite students' first-hand use of English as a lingua franca in the EMI environment. The background factors for this familiarity with US English include its common use in Japanese ELT materials and in pop culture contexts. At the same time, the personal conditions, such as friendships and interactions with the speakers of a specific variety, may result in a preference for English in Canada/Australia/New Zealand and in the Expanding Circle.